

ピカロとしてのクルル

— 『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』 —

三 枝 圭 作

(1994年6月21日受理)

1

『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(以下『クルル』と略す)が、トーマス・マンの長年にわたるたびかさなる執筆中止を経て、結局断編のまま未完に終わったことは周知の通りである。マンが『クルル』に着手したのは1909年のことであるが、当時彼の創作の中心にはまぎれもなく「市民」と「芸術家」の問題があった。従って、『クルル』は当初、『トーニオ・クレーゲル』と『ヴェニスに死す』との間のいわばサテュロス劇⁽¹⁾であったと言えよう。

マンは長い間、彼のサテュロスたる詐欺師の、ピカロとの類似にあまり気がついていなかった。しかし、彼が中断をくり返しながらかつて『クルル』の仕事が続いているうちに、次第に主人公の悪漢との近親関係を意識するようになる。ヴィースリングによれば、マンが1947年10月10日付でアグネス・E・マイヤーにあてた手紙には、当時の彼の仕事の計画として次の言葉がある。

今日の貴人用馬車時代を舞台とする悪漢小説へのクルル・断編の拡充

また、同年11月25日のヘルマン・ヘッセあての手紙にも次の文面が見られる。

昔の『フェーリクス・クルル』の断編を書き足して老後の楽しみに、本格的な悪漢小説に仕立てるといふのはどうでしょうか。⁽²⁾

これらの手紙によれば、マンは執筆開始からかなり後になって、『クルル』をピカレスク小説に仕立てようとしたことがわかる。彼はその後も何度か冒険・悪漢小説のことを話題にしている。例えば、1951年10月10日付のオスカル・ザイドリンあての手紙には、

それは「第1次世界大戦前の後期市民社会時代の一種の冒険小説でしょう。『ジンプリツイウス・ジンプリツイシムス』がはるかな手本とされるような素朴な回想録です。」⁽³⁾

とあり、同じ年の11月19日付のヘンリイ・ハットフィールドあての手紙の冒頭は次のように始まっ

ている。

リアリズムについてのあなたの論文は大へんすぐれたものです。早速、非常に面白く拝見しました。特に惹きつけられたのは『ジンプリツイシムス』と悪者小説についての論述ですが、これは、いまちようどまた「ピカレスク風」の手すさびに取りかかっているという私の個人的な事情のせいです。⁽⁴⁾

マンは40代に『ジンプリツイシムス』に親しんだものと思われるが、50代の彼がいまここで『クルル』の主人公フェーリクス・クルルの手本にしているのは、ピカロの元祖スペインのラサリーリョ・デ・トルメスというよりは、ドイツのピカロ、ジンプリツイウス・ジンプリツイシムスだったのである。

2

ジンプリツイウスとフェーリクスの人生は一見して異なっているようにも見えるが、基本的にはかなり共通点が多い。彼らは冒険を好み、旅をこととして定住せず、職を転々として着かぬ。互に放らつに生きているにもかかわらず、彼らには幸運がおとずれる。とくに両者のパリにおける姿は象徴的である。一方は馬丁として、他方はエレベーターボーイとしてパリ生活を始める。二人は美声や端正な容姿に恵まれて人目をひき、共に似たような幸福を手に入れる。前者が俳優としてボー・アルマン(美しいドイツ人)と呼ばれるほどになれば、後者は俳優にこそならなかったものの、その美しさをヘルメスの彫像と比較される。パリの女たちは、上流下流を問わず彼らをめぐって競いあうのである。ジンプリツイウスはある老婦人によってパリのあやしげな「ヴィーナス山」に誘われる。ベッドのなかから若く美しい女が彼に声をかける。

「いらして、ムシウ・ボー・アルマン、一緒ニ寝テ、ワタシノハート、^ギ來テ、ソバニ^ギ來テ！」
老婦人がそれらのドイツ語を教えておいたらしかった。私はどのようにお相手をしたものかと考えてベッドに近寄った。ベッドのそばに立ったとたん頸玉に抱きつかれ、接吻の雨で歓迎され、火の玉のように熱した相手の歯が下唇に噛みついた。相手は私の寝室衣のボタンをもどかしそうに^{はず}外し、私の下着を引き裂かんばかりに性急に押し開き、私の体をぎゅっと引き寄せ、狂気じみた情熱に燃え立ち、譬えようもない身悶えをした。「ソバニ^ギ來テ、ワタシノハート」というドイツ語が喋れるだけであつたので、その他はすべて身ぶりて要求してきた。⁽⁵⁾

20世紀の今日、この場面はマンによって再現された。ウプレ婦人はパリのセント・ジェイムズ・アンド・アルバニー・ホテルのベッドのなかで、エレベーターボーイのフェーリクスに言う。

「さあ、脱いで、とって、それを脱いで、それも」と彼女の声がせきたてた。「脱いで、捨てて、お前が見られるように、神の姿が見られるように。はやくして。時刻が迫っているのに、お前ったら、どうして御聖堂に行く準備ができていないの。脱いでよ、はやく。焦れたいわ。婚礼の衣裳。神のようなお前の身体を私はこう呼ぼう。お前を最初に見たときから、これが見たくてわたしは渴いてたんだわ。ああ、こうだったのね。ああ、この姿。神聖な胸、肩、うっとりする腕。とってよ、いいからそれも——おう、ラ、ラ、これでこそ騎士道だわ。来て、恋しい人、私のところに来て」(Ⅶ-442)⁽⁶⁾

このきわどい件は、マンが中断していた『クルル』の仕事を再開した後に書かれており、ピカロ小説としての『ジンプリツィシムス』への彼の傾倒ぶりの一端を示している。

以上のように、彼らの女性体験は極めて類似しているが、精神の面での彼らの冒険はどうであろうか。次にそれを見てみよう。好奇心の強いジンプリツィウスは代父の案内で森の奥のムンメル湖にメルヘンの旅をする。彼は水の精に伴われて湖底に安着し、地底の暴力のない平和な国の姿に目をみはる。太守や王様との会話を通して、彼は肉体と精神、宗教と自然、上と下、善と悪などを超越した世界を知る。⁽⁷⁾

一方、フェーリクス・クルルは今世紀の住人で、ジンプリツィウス・ジンプリツィシムスのように地底への旅をするわけにはいかない。精霊たちと話をすることもできないが、彼に語りかけてくれるのは古生物学者のクックク教授である。教授はフェーリクスに学問的に或は思弁的に地質学、生命の誕生、人間の進化、宇宙空間などについて高度な話を聞かせるのである。

このように見てくると、ジンプリツィウスもフェーリクスも、共に人生の講義を受けていることがわかる。従って、この面でも『クルル』は『ジンプリツィシムス』の影響を受けていると言えるようである。しかも、両者に共通していることは、いずれの講義も彼らの人生に役立っていないということである。ジンプリツィウスが、湖底での体験によって精神的に生れ変わり、その後悪漢生活をやめた形跡は全くないし、同様に、古生物学者の質の高い話がフェーリクスの教養に寄与したとも思われぬ。フェーリクスの精神的詐欺師ぶりは相変わらずである。そのことは、いわゆる「クックク対話」より少し後の章で、フェーリクスがクックク夫人やその娘ズーとかわす会話、及び彼の彼女たちに対する相も変らぬいかさまな態度、などを見ても明らかである。

グリンメルスハウゼンの冒険・悪漢小説『ジンプリツィシムス』は、構成においてもマンの『クルル』に影響を与えている。つまり、双方の主人公の旅には計画性が欠け、まとまりと統一がない。これは冒険小説一般に特有の現象のひとつであるが、物語においては、主人公の多くのエピソードがばらばらにつながっており、人物と場所が突然に現れてはすみやかに消えていくのである。従って、この種の小説のあわただしくて移ろいやすい有様は、メルヘン風でさえある。マン自身、「『ク

ルル』の場合には、作品の世界が幻覚的なものでもよかったと思う。(IX-160)」と述べているが、そこでは時間と空間とがいささか混乱していて、すでにこの言葉通りになっている。フェーリクス・クルルは、回想録で自分の人生のデータを展開する際に、その若き日々の体験を年代順に並べて見せるというよりは、それらを勝手に混ぜあわせて見せるのである。ドイツの教養小説の主人公が次第に自己を発見し、内面的形成をとげるに至るまで向上するのに対して、ピカロ小説の主人公は、連なる出来事にいつまでもただもまれていただけである。つまり、悪漢小説は発展的に完結することがない。はてしなき連続である。トーマス・マンはあるインタビューに答えて、その理由を次のように述べている。

更に400ページだけ書き続ける時間と気分が私に与えられても、断編は多分依然として風変りな本のままで終るでしょう。この本はいうまでもなくそれを書き上げることにはねらいを定められてはいません。この本はつねに更に書き続けられ、創作し続けられることができるのです。それはすべての可能なものが掛けておかれることのできる足場であり、思いついたり、人生が運んでくるすべてのものをしまっておくための叙事的な空間なのです。私がこの本について言うことのできる最も特徴的なことは、恐らくこの本がいつか中断され、中止されるでしょうが、決して完成されないだろうということです。それはそうと、この本はその原形が『ジンプリツィウス・ジンプリツィシムス』であるところのピカレスク小説、冒険小説のタイプと伝統に属しています。(IX-530)

ところが、これに反してジンプリツィウスは晩年は隠者となり、一応人生を完成した諦念の境地に至る。これはピカロとしては例外的ではなからうか。一方のフェーリクスも刑務所の中とはいえ、回想録の執筆者として安泰の境遇にあるのは事実である。しかし、フェーリクスがいつかジンプリツィウスのような自己克服者になるであろうということは考えられない。このことは先の引用からも容易に察せられるだろう。この点で、教訓から学ぶことのできない男フェーリクス・クルルは、ジンプリツィウス・ジンプリツィシムスより以上に悪漢小説の原形のタイプに近いと言えそうである。

3

フェーリクス・クルルは、もともと市民と対立する芸術家たち、トーニオ・クレーゲルやグスタフ・アシェンバハの兄弟の一人として生れた。しかし、フェーリクスはこれらの兄弟たちとは違った意味での極めて風変りな芸術家である。その経歴は、生い立ちから数々の冒険に至るまで、彼らのそれよりはピカロのそれとはるかに多くの共通点を持っている。このことは、フェーリクスが悪

漢ラサリーリヨ・デ・トルメスの400年後に生まれたいとこ⁽⁸⁾であることを示しているのではなからうか。そこで、このいとこたちの類似点をまず生家の姿から見てみよう。

彼らの父親はいずれもあやしげな商売を営んでいる。フェーリクス之父はシャンパン酒を醸造していたが、「少なくともエンゲルベルト・クルル商会がその壘の外側を、専門的にはコワフェールと呼ばれるあの仕上げの装飾を、たいそう重く見ていたことは確かだ。ねじりこまれたコルク栓は、銀線と金を塗った糸とでしっかりと押えられ、その上を真っ赤な封ろうで封じられていたが、さらに特別に教書や古い国家文書に見られるような、荘重な円封印が金モールの先にぶら下がっていた。壘の首にはきらきらした錫箔がたっぷりと着せられ、胸には、己の名付親のシンメルプレースターが商会のために考案した、黄金色の唐草模様で飾られたレットルがいかにも派手に貼ってあって、このレットルにはいくつかの紋章と星、金文字で印刷された己の父親の署名と『ロルライ・エクストラ・キュヴェ』という商標のほかに、腕輪と首飾りだけを身につけて岩の頂にすわり、脚をくみ、腕をかざして、波打つ髪をくしけずっている女の姿が見られた。ところで、この葡萄酒の品質は、こうしたまばゆいばかりの外装と完全に一致するものではなかったらしい」(Ⅶ-267/268)。この場合、シャンパン酒の壘の中味より、壘のレットルのデザインなどが問題にされているのである。ラサリーリヨ之父の場合には、それは小麦粉の袋であったが、いずれにせよ詐欺であることに変わりがない。彼らのコワフェールには非のうちどころがない。しかし、結果は破産である。ラサリーリヨ之父は火刑に処せられ、フェーリクス之父はピストル自殺をする。

彼らの死後、残されたエンゲルベルトの妻やラサリーリヨ之母も、これまたそれぞれの夫たちと同じようにあやしげな商売で露命をつなく。彼女たちは都会へ移って旅館業を営むのである。クルル夫人は、生来の客好き、料理の腕を生かして又貸しの賄いつき下宿屋「ローレイ荘」を開く。宿屋は繁盛するが、下宿人たちは女主人の料理の腕よりも、魅力的な彼女の別の面を期待しているふしがある。

また、ラサリーリヨやフェーリクスの出生地についても見逃されてはならない。前者はトルメス河で生まれているが、後者はライン河畔の小都市に生れている。「これはライン河がマインツ近辺で描く彎曲部のやや西よりにあって、シャンパン酒醸造で名高く、ライン河を上下にいそぐ汽船の主要碇泊地であり、人口およそ四千をかぞえる。だから、あのおもしろおかしいマインツもすぐ近くなら、タウヌスの上品な温泉場、ヴィースバーデン、ホンブルク、ランゲンシュヴァルバハ、シュランゲンバートにも遠くはなく、シュランゲンバートへ行こうと思えば、狭軌鉄道に半時間も乗ればよかった。好ましい季節には、己たち、両親と姉のオリュンピアと己とは、船に乗り、馬車を駆り、汽車に揺られて、東西南北あらゆる方角に、いくど遠出を試みたことであつたらう。いたるところに自然と人間の機智とがつくり出した歓楽境があり、名所旧跡があつて、己たちを誘ってやまなかった」(Ⅶ-266/267)。ライン地方は、ドイツでは歴史的に古代ローマの地中海世界と最も関係

の深い地域である。フェーリクスとは全く別の道を歩む英雄的文士グスタフ・アシェンバハは、水の町ベニスで破滅するが、このことは、水との関連で言えば、河のほとりに生れたアンチ・ヒーローの将来を暗示しているのかもしれない。いずれにせよ、快適でめぐまれたこの地帯は、カトリックの地でもある。フェーリクス・クルルはトーマス・マンが生んだ唯一のカトリックの主人公であるが、このカトリックの地こそが、カトリックの地スペインのピカロの後裔を育むのに一番ふさわしいところだったのではなからうか。

4

ラサリーリョやフェーリクスは、共に不利な出生の補填という共通の目標のもとに、旅と冒険を友にきままに生きている。元来、ピカロの暮しは偶然が相手であり、その生き方には明日の安定がない。彼は違法な手段でときに幸運を手にすることがあっても、彼には家族もなければ、財産もない。この根なし草は、故郷喪失者にして、人生のアウトサイダーである。トーマス・マンの初期の作品『トーニオ・クレーゲル』には、「なんと言おうとわれわれは緑色の車に乗ったジプシーではない。われわれはきちんとした人間なのだ。領事クレーゲルの一族、クレーゲル家の人間なのだ。」(Ⅷ-275)という箇所があるが、ジプシーの仲間に加わり、海賊と結び、旅芸人の一座に身を投じ、或いは売春婦のひもになったりするピカロは多い。ここでは、トーニオが自分はあくまでこのようなアウトサイダーではないと主張しているのであるが、上述のフェーリクスは、完全にアウトサイダー、ジプシー側の人間である。

しかも、アウトサイダーは冒険や自由を満喫しているが故に、孤独という代償を支払わなければならない。この点はこっけい味あふれる主人公の一番切ないところである。ピカロは、それが友情であれ恋愛であれ、人間関係を生み出す能力がない。つまり、誰にも属さない自由人に、属してくれる奇特な人間が現れるはずはないのである。ラサリーリョやフェーリクスは異性関係においても孤立している。前者の若い妻は実はある金持ちの男のもので、その男が彼女をラサリーリョに押しつけていたことが後になって判明するのだが、後者の最初の性の出合いの相手である自分の生家の小間使の女ゲノフェーフアも、実はある小駅の駅長とずっと前から婚約していたのである。彼らは経済上の理由で結婚を延ばしていたのに過ぎない。Betrüger であるはずのフェーリクスは、der Betrogene⁽⁹⁾ だったのだ。彼は彼女にとっては駅長の代用品に外ならない。このように、フェーリクスは性の陶醉のなかで孤独を余儀なくさせられている。トーマス・マンは「『ファウストゥス博士』の成立」のなかで、「孤独のモチーフ」を自分の小説の出発点のひとつに挙げているが、それは、フェーリクス・クルルにおいてはユーモアあふれる犯罪的な形で、グスタフ・アシェンバハやアードリアーン・レーヴァーキューンにおいては悲劇的運命的な形で結実したのである。しかし、前者

の孤独においても、そのおかしみにもかかわらず、何か悲劇的な調子が感じられるのもまた事実である。

「孤独のモチーフ」は、更に、悪漢小説に特有の主人公が第1人称で語るという自伝的形式と関係があると思われる。主人公が孤独な人生を告白する場合、これは極めて適切な形式であると言えよう。あらゆる権威、あらゆる社会的規範を拒否した孤独な人間にとって、個々のエピソードを有機的に統合する手立ては第1人称の Ich しかない。個々の体験はもはや客観的事実ではなくて、主人公の主観的判断にまかされる。トーマス・マンの作品のなかで、厳密な意味でこのような自伝的形式をとっているのは『クルル』だけである。

「己が筆をとって、隠棲の日々の暇にまかせて——それはそうと己は健康だが、ただ疲れている、ひどく疲れている…」(Ⅶ-265)。『クルル』の冒頭はこのように始まっているが、これはすべてのピカレスク小説の冒頭にも適用できるであろう。いや、世界文学の最大の自伝、かの聖アウグスティヌスの『告白』にさえもあてはまるかもしれない。なぜなら、自伝にはまず語り手が登場しなければならないからである。その多くは世間から身を引いた隠者であり、彼は深い森の奥で過去の自分の人生を回顧する。従って、彼の人生は、現に目の前で起こっているものではなく、すでに起こったものであり、今あるものではなく、あったものである。語り手の Ich は事の後であり、事の中にはない。彼の人生はつねに過去に存在しているのである。

ところで、この隠者、つまり Ich-Erzähler には、過去を語りながら、好んで道徳的訓戒を垂れるという特徴が見られる。これは、悪漢小説の著者による、当時の権力者や異端審問の目をごまかすための試み、否、ひとつの *captatio benevolentiae*⁽¹⁰⁾ と考えられているが、この場合、*captatio benevolentiae* における作者のイロニーが見てとられなければならないことは言うまでもない。イロニーは、不道徳でいかげわしいピカロの悪行を語りながら道徳を説くためには不可欠な手段となる。イロニーについては後で述べる。

さて、このような次第で、物語のなかでは、教訓が主人公によって提示されていることは勿論であるが、一方で、物語は主人公を教育する教育係を必要としていることも当然である。ラサリーリョ・デ・トルメスの教育係は盲目のルンペンであり、ジンプリツィウス・ジンプリツィシムスにあっては森の隠者である。しかしこの場合、ラサリーリョの意地悪のこじきの教育係とは趣がちがひ、隠者は無知な男に敬虔な精神を教える。フェーリクス・クルルには、何かあやしげなところのある男、名付親のシンメルプレスターが登場する。彼は「かなり名高い芸術家で、…故郷の小さな市ではみなに『教授』と呼ばれていたものの、この立派な望ましい称号が公式に彼に送られたことはなかったようだ」(Ⅶ-265)。彼は窃盗の罪を犯して監獄で死んだギリシャの彫刻家フィディアスの故事を持ちだすのを好む。

「フィディアスは」と彼は言った。「ファイディーアスとも呼ばれていますが、容易に端倪すべからざる才能の士だったのです。彼は窃盗の罪を犯してアテーナイの獄につながれたが、この事実がすでに彼の才能を証明しています。女神アテーネーの像を依頼された彼は、預けられた材料の金と象牙を横領した。彼の才能の発見者であるペリクレスは彼を牢獄から逃がしてやりました(このことで、ペリクレスという識者は、芸術ばかりではなく、それよりもはるかに重要なことですが、芸術家の本性にも理解をもっていたことを証明したのです)。それから、フィディアスあるいはファイディーアスはオリュンピアに行きましたが、ここでは、金と象牙とでゼウスの巨像をつくるように依頼された。彼はどうしたと思います。またしても盗んだのです。そしてオリュンピアの監獄で死にました。才能と盗癖とは奇妙な組合せですね。……」(VII-283)。

シンメルプレスターは、その名前からしてすでに彼の役割を示している。彼自身の説明によると、「自然は腐敗とシンメル 黴 以外のなにものでもない。ところで、このわたしは自然のプレスター 司 祭 に任ぜられているのだ。だからわたしの姓はシンメルプレスター、黴の司祭というわけだ。もっとも、なぜわたしの名がフェーリクスであるか、それは神様だけがご存じだろう」(VII-283)、ということになる。この黴の司祭は自分の代子フェーリクスに人生の脇道を次のように教示する。

わたしの意見では、肝心なのは何よりもまず、この子に人生への、学校のお偉方が誤解からこの子にはそれへの名誉ある入口を与えてやるわけにはいかないと考えた、あの人生への道を拓いてやることなのです。まずこの子を外に出してやりさえすれば、波はきっとこの子を乗せて、わたしの確信どおり、美しい岸辺に運んでゆくでしょう。そこで、ホテルの経路、給仕という経路こそ、彼の場合にはもっとも好都合な見込みを示すものと思われます。これは、一生この仕事ですすむとしても(この方向をとれば非常に立派な身分になることもできます)、左右いろいろの道にそれ、不規則な脇道にまぎれこむとしても好都合な見込みのあるものですが、脇道といえ、それはこれまでも数多くの幸運児のために、普通の大道のほかに幾本も開かれていたのです。(VII-333)

この教えが、将来のフェーリクスの詐欺師としての人生に決定的な影響を与えたことは、容易に推測される。そのほかに、シンメルプレスターは弟子の心に Selbstliebe や Eitelkeit を養い育てる。彼は、フェーリクスの父の死後、自分の後見人の母や姉に対しても、彼女たちの人生への助言を与えている。フェーリクスは人生の岐路に立つたびに、黴だらけの師の教えに従うのであるが、そこには母や姉の姿はない。

5

ピカロ小説に見られる教訓・訓戒がイローニッシュに理解されなければならないということについてはすでに触れたが、フェーリクス・クルルはイロニーでもって、この道徳のおしゃべりの仮面を見事にはぎ取って見せてくれる。このいかさま師は、獄中の身ながら、自己の Schelmereien の回想記をあえて「告白」と称し、かの聖アウグスティヌスやルソーの感動的な記録を連想させることによって、犯罪者の改悛の風をよそおいながら、皮肉な笑みを浮かべている。何という恥知らず、あつかましきであろうか。ここには、あらゆるまじめなもの、誠実なものへの不敵な挑戦、ちゃかしがある。女中ゲノフェーフアとの彼の情事の告白は、次のように始っている。

未見の読者よ、はじめに流暢な筆をかたわらに置き、しばし沈思黙考して心を鎮めたうえ、いまや己は、誠実な心が命ずるままに、ここに、己がこれまでの告白のなかでもすでにいろいろと触れてきた領域に入ろうと思う。そうは言っても、己がふしだらな口調をつかい、みだらな冗談でも言うかと期待するものは幻滅を味わうであろうことを前もって断わっておく。己はむしろこれからさきの文章では、この手記の冒頭で約束した真率さに、道徳と礼節とが命ずる、かの抑制と真面目さを注意深く結びつけるつもりなのだ。それというのも、己には一般の人びとがあのように猥談を慰みにするのがどうしてもわからないし、口の放埒をいつももっともいまわしいものと思っているからだ、これは軽薄このうえないもので、情熱を理由に弁解することはできないのである。(VII-276)

この気どりの背後で、フェーリクスが舌を出しているのは明らかであろう。他方、彼は周到にも、うえのような抑制と真面目さを無視すべき許可証もひそかに手に入れておくのである。

己は、この回想録を主として、かつ、第一に己自信の慰み、退屈凌ぎに綴っているのだと、前のほうで幾度も断言はしたものの、この点でも真実に敬意を表して率直に白状すると、じつは、これを書いている間じゅう、己はひそかに、いわば眼のすみから読書界をうかがい見ているのであって、読書界が関心をもってくれる、喝采してくれるという希望に鼓舞されなかつたなら、おそらくこの仕事を現在のところまで進めるだけの根気さえ持てなかつただろうと思う。己は、生涯の秘密を、全くありのままに、ただ謙虚に、率直に告白するこの回想録が、作家の虚構の作品と張り合うことができるものかどうか、つまり読者の愛顧を争って張り合うことができるものかどうかという疑問を、われとわが身につけてみなければならなかつたが、読者というものは、奇矯な虚構の芸術作品によってどれほど食傷し、鈍感になっているかと考えても、それは考えすぎではないのである。(VII-322)

イロニーの最後の例として、フェーリクスが徴兵検査の場面で、身ぶりたっぷりに仮病を使う自分の行為を正当化しようとする箇所を引用する。

判断力のある読者よ、この瞬間に己の眸にこもっていた痛ましい訴えは、計画された、下心あつてのものではあったが、それでも己は、決して嘘をついていたのではなかったのだ。なぜなら、嘘とか偽善とかの宣告がくだされなければならないのは、むしろ、ある感情を不正に模倣した場合だからである。そういう場合、表面にあらわした感情は、真実をも持たず真の体験をも欠いているために、結果はあさましくもまた必至に、醜悪と拙劣に終るのである。しかし、われわれの貴重な体験の表現を自分の好む瞬間に、ある目的をもって使うことは許されていいのではなかろうか。(VII-361)

読者は、かくも巧妙な決議論⁽¹¹⁾をつきつけられては判断に迷ってしまうのではなかろうか。とにかく、フェーリクスの前で、軍当局の権威が笑いの対象にされている。フェーリクスは軍に敢然と、立ち向かっているのだが、それは抵抗によってではなく、服従と礼節によってなされている。原則を攻撃することによってではなく、原則を信じることを表明することによって、原則の虚偽があばかれている。この意味で、悪漢小説は風刺文学の頂点に立っていると言えよう。悪漢の世界では、既存の秩序における代表者たちは裸にされる。読者はピカロの破廉恥な行為に喝采を送り、彼の欺瞞が成功し、冷酷な聖職者、いばりちらす政治家、腐敗しきった免罪符販売人が断罪されることを願うのである。

以上のように、尊敬すべき世間の価値を笑いに供するのがピカロの使命であるが、そこに生ずるフモールやウィットの本質は、ピカロの滑稽な芸当にあるのではなくて、彼によってあばかれるところの権威とその仮面の下にある愚劣との間における矛盾にある。

仮病使いフェーリクスの巧妙な自己正当化については先に引用した通りであるが、他の箇所でも彼が、意志の力で自分の病気を作り出す能力について述べている。

己はこの病的徴候をつくりだした。そして、この病的徴候が己の手をかりずに自然にあらわれたときに持つことができるのと全く同じ効果を発揮させた。己は自然を改良して、一つの夢を実現した。——誰にしる、無から、事物のまったく観念的な知識と直感とから、つまり空想から、おのれの身を大胆に働かせて、異論の余地のない有効な現実を創造することができた人なら、当時己が、自分の創造を終えて休む時に感じた、あの不可思議な夢のような充足の気持がわかるはずだ。(VII-302)

以上の二つの例のいずれの場合にも、崇高な目的のためにはさしもの肉体も、意志の力によって負かされることが謳われている。つまり、トーマス・マンが、ここでイロニーやフモールを駆使して

示したものは、現実の陳腐に対する精神の勝利だったのである。

注

- (1) Oskar Seidlin : Von Goethe zu Thomas Mann. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1963, S. 163.
- (2) ヘッセ=マン往復書簡集 井手貢夫・青柳謙二訳 (筑摩書房) 1975年 P. 171.
- (3) Thomas Mann : Briefe 1948-1955. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1965, S. 223.
- (4) Ebd., S. 231. なお, マンの作品からの引用については, 邦訳「トーマス・マン全集」(新潮社) 1972年. に訳文がある場合, それを借用している。
- (5) Hans Jakob Christoffel Grimmelshausen, Der abenteuerliche Simplicissimus, IV. Buch, 5. Kap. 阿呆物語 中 (岩波文庫) S. 157.
- (6) トーマス・マンの著作の底本としては, Thomas Mann : Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt am Main 1974. を用いた。本文中の引用にはその巻数とページを (Ⅶ-442) の形で記している。
- (7) Hans Jakob Christoffel Grimmelshausen, Der abenteuerliche Simplicissimus, V. Buch, 12.-17. Kap.
- (8) Oskar Seidlin : Von Goethe zu Thomas Mann. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1963, S. 164.
- (9) Ebd., S. 171.
- (10) Ebd., S. 174.
- (11) Guido Stein : Thomas Mann, Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull : Künstler u. Komödiant. Paderborn ; München ; Wien ; Zürich : Schöningh, 1984, S. 61.

